

土器文様と「時」を追う

土器は、粘土を焼いて作った「うつわ」のこと
で、北海道では縄文時代・続縄文時代・擦文時
代に使われてきました。その多くには文様が施
されており、各時期の特徴や地域的特色が見え
てきます。石狩市内の遺跡でも、これまでにい
ろんな土器が発見されてきました。

写真①は、志美4遺跡(新港東)から出土し
た壺形の土器です。この遺跡では、主に縄文時
代晩期(3千~2200年前頃)の土器が出
土しました。①には、繊細な縄目の文様が見ら
れ、上半部には沈線(ちんせん)で雲形のような文様が表
現されています。器の口には刻みを入れ、成形・
文様ともに丹念に作られています。このような
特徴の土器は東北地方の縄文時代晩期が中
心で、その影響を受けた土器が市内の出土品
にも見られます。



写真① 志美4遺跡出土 高さ15.6cm

写真②は、若生C遺跡
(若生)から出土した続縄
文時代後半の注口土器
で、古墳時代の頃に北海
道で使われていたもので
す。②には、弧を描くよう
に表現された微隆起線文・
列点文・帯状縄文の組み
合わせで文様がつけられ
ています。赤色顔料の痕

跡も確認されます。同様の
特徴をもつ文様の土器は、こ
の頃の北海道全域に見ら
れ、後北式土器と呼ばれて
います。

写真③は、若生C遺跡から
出土した擦文時代の甕形
土器です。平安時代の頃に北
海道で使われていたもので、
縄目の文様が見られなくな
ります。「擦文」の名称は、土
器の表面にハケメがあること
に由来し、器を作るときに木
へうで調整した擦痕と考えら
れています。③には、擦文土器に特徴的な刻線文
が施されています。

土器の文様は、当時の人々の手仕事の息づか
いが感じられ、現代の我々をも魅了します。また
同時に、器形や文様にみられる特徴や変化を通
して、時期を推定したり、地域的な広がりや考
えたりするための手掛かりにもなります。身近
なところに埋もれていた土器の発見が、数千年
の時空を追うための「時」のモノサシとして、歴史
を照らす重要な役割を担っているのです。

(荒山千恵)



写真② 若生C遺跡出土 高さ12.4cm
市指定文化財



写真③ 若生C遺跡出土
高さ9.9cm

※写真①~③は縮尺不同

開催中

テーマ展「土器文様の不思議」

—石狩市内の遺跡から—

日時 11/6(月)まで ※火曜休館
9時30分~17時

場所 いしかり砂丘の風資料館(弁天町30・4)

費用 入館料300円(中学生以下無料)



石狩市学芸員
荒山千恵 Chie Arayama

専門分野は考古学。北海道での遺跡発掘調査をはじめ、出土した木の道具、音の考古学などの研究を行う。

閩文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711

ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。